

## イスラーム・ジェンダー学科研 2020 年度『巣ごもり読書会』

イベント名：「イスラームのアダム」

日 時：2021 年 3 月 29 日（月）20:00-21:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

語り手：澤井真氏（天理大学）、長沢栄治氏（東京外国語大学）

司 会：木原悠氏（お茶の水女子大学大学院）

\*\*\*\*\*

木原：これより巣ごもり読書会「イスラームのアダム」を開始いたします。本イベントは、科研費基盤研究 (A)「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」(イスラーム・ジェンダー学科研) ならびに、科研費新学術領域研究「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立」B01 班「規範とアイデンティティ」の共催となっています。本日の司会はお茶の水女子大学大学院の木原悠が務めさせていただきます。

本日の流れですが、まず私のほうからご登壇の先生方のご紹介を簡単にさせていただきます。その後、澤井先生にご著作をご紹介いただき、次に長沢先生からコメントをいただきます。そのあとに澤井先生の応答を含めて質疑に移りたいと思います。

\*\*\*\*\*

木原：本日のご登壇者のご紹介をさせていただきます。

澤井真先生は、現在、天理大学おやさと研究所の講師をつとめられています。ご専門は宗教学・イスラーム思想研究・天理教学です。本日取り上げる図書『イスラームのアダム—人間をめぐるイスラーム神秘主義の源流』は昨年 2020 年 12 月に慶応義塾大学出版会より刊行されました。300 頁近くにもなる大作で、「アダム」という最初に創造された人間への考察を通じてイスラーム神秘主義思想において、「人間」に対する知がどのように積み上げられてきたのかということを一明らかにしています。

対談相手の長沢栄治先生は、本科研プロジェクト「イスラーム・ジェンダー学」の代表をつとめられています。現在は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所リサーチフェローならびに東京大学名誉教授でおられます。ご専門は中東地域研究・近代エジプト社会経済史で、2019 年には『近代エジプト家族の社会史』を東京大学出版会より刊行されました。

本日はヒューマニズムあるいは人文学研究にとって「イスラーム・ジェンダー学」の視点から考えることがどうして重要であるのかという点について、澤井先生のご著作と絡めてお話をいただけたこととです。

それでは、早速、澤井先生によるご著作紹介に移りたいと思います。

\*\*\*\*\*

澤井：初めまして、澤井真と申します。本日は、私が今年の 12 月に出版させていただきました『イスラームのアダム』という著作についてご紹介させていただきながら、皆さんと一緒に、人間・人文学とい

うテーマについて広く考えていくことができたらと考えております。最初に少しお時間をいただきまして、私が出版しました著作についてご紹介させていただきます。

私の『イスラームのアダム』という著作は「人間をめぐるイスラーム神秘主義の源流」という副題がついています。第一部（四章）、第二部（四章）、結論という形で第八章までの構成となっております。私の専門分野は宗教学で、もともとずっと宗教学の方を勉強していきまして、そこからイスラームのことに関心を持ち、何となく自分が宗教学というバケツに両足をつっこんでいたように思っていたのですが、片足はイスラーム研究の方によりやく突っ込めたかなという感じがしています。ただ軸としては宗教、宗教学を考えてまいりました。

私自身がどこから研究を始めたのかということを見ると、宗教学という学問分野で神秘主義という概念が広く扱われていて、その時に宗教学という学問にとってのイスラーム神秘主義とはどんな位置付けだろうかということ考えた時に、かなり居心地が悪い面があることに気づきました。キリスト教神秘主義を背景にして登場した神秘主義概念は、良くも悪くもキリスト教的な背景を帯びておりますので、イスラームに同じものを当てはめようとすると、どうしても理解しにくい部分があります。ヒンドゥーのヨガ、日本の禅にも同じことが言えるのかもしれませんが、まず宗教学の神秘主義研究におけるイスラーム神秘主義というところから、その歴史的な背景をまとめてその系譜をたどってみたいという経緯です。皆さんは「イスラーム神秘主義」という概念とともに、「スーフィズム」という概念もご存じだろうと思います。このスーフィズム・イスラーム神秘主義という概念がどういう経緯で登場してきたのか、そしてそれが神秘主義研究、さらには宗教学のみならず、人文学も含みうるようなかたちの人間探究とどう結びつくのかという問題意識を説明したのが序になります。

そして第一部では、アダムという原初の人間が、クルアーン解釈のなかでどのように扱われているかを、この原初の人間というのが、かなりの程度「人間」全体を規定していく側面がありますので、それをアダム神話と呼び、クルアーンの解釈学的な考察を行っています。

そして第二部においては、イブン・アラビーという——「シャイフ・ル＝アクバル」（最大の師）とアラビア語では呼ばれたりするのですが——今日の回にご参加いただいている青柳かおる先生たちが研究されているガザーリーと並んで、イスラーム思想において非常に大きな影響力を有している思想家を扱って、彼のアダムを中心とした神秘主義思想、もしくは神秘主義的人間論が、現代にいたるまでどのような形で展開しているのか、を扱いました。結論では、それまでの議論をまとめて、少し私自身の思うところを書きました。

次に、本書の問題設定といくつかの問題意識についてご説明いたします。そもそも問題設定は、「イスラーム神秘主義という現象がどういうものか」を、そこに登場する神と人間が、いかなる形で関わりあっているのかを、アダムという接続点から理解しようというものです。

それとともに、先ほどそれぞれの章の構成の中で申し上げましたが、それを考えていくうえでいくつかの問題意識、その本章を形作る伏線というものを提示しています。一つ目は、宗教学における神秘主義概念。二つ目が、宗教学とイスラーム研究のあいだ、そして両者をどのように架橋することができるのか、神秘主義研究からその二つがどう結びつくのか、です。現在の宗教学とイスラーム研究は、有機的に結びついているというよりも、宗教学は宗教学で研究している人がいて、「何かイスラームって難しいよね」という印象をもっています。他方、イスラーム研究の方はイスラームに軸を置いています。「宗教学では、イスラームは宗教だからね」というかたちで関わっているという一面があるので、宗教学とイスラーム研究のあいだを考えたいと私自身は思ってきました。三つ目ですが、『イスラームのア

ダム』という著作を、実は私自身、そういう問題意識を明確にもって研究してきたわけではありません。イブン・アラビーの存在一性論やテクストを読んでいく中で、彼の思想において、中心的な役割を果たす「完全人間」という概念が、アダムと非常に密接不可分な関わりを持っていることに気づき、そこからイスラームのアダムについても考えることになりました。最後、四つ目ですが、アダムという存在とイスラームの神秘主義的人間論を通して、人間をはじめとする全存在を新たなかたちでいかに認識するのかという、挑戦のようなもの、その点についてイスラームの神秘家たちから考えたいというところもあります。こうしたことが問題意識として本書を貫いています。

そしてなぜアダムなのかについてですが、アダムと言えばユダヤ・キリスト教の宗教伝統の中で最初の人間を占めており、イスラームにおいても最初の人間だということは周知の事実です。しかしそこからイスラームのアダムってどういう存在なのかと言われたら、「ちょっとよくわからない」というところがおそらくあると思います。

私自身が理解している限りではありますが、このアダムという存在は、第一義的に時間的な始原、最初の時において神と関わることで、それ以降の人間存在全般を規定するような役割を果たしています。クルアーン、ハディース、様々な歴史書、タバリーをはじめとした歴史書の中では、アダムという人間が出てきて樂園から追放されるとか、神と契約を結ぶとか、イヴがアダムから誕生するとか、いろいろな説話があります。それらを通して、それ以降の人間という存在がいかなるものかが規定されています。しかし、規定されていると言っても、どのように解釈されて規定されているのかというところは、必ずしも明らかになってこなかったのではないかと私は考えてきました。

例えば、「人類 (human beings)」にあたるアラビア語として、「バヌー・アダム」があり、これは「アダムの子孫たち=人類」と翻訳することがあります。ここには、アダムが軸になっていてそれ以後に登場する人間たちが、一つの人類であると理解される側面があるだろうと思っています。ですが、ある意味でこのアダムという存在は、神話的時間を生きる、もしくはアダムという存在を通して、アダムという神話、つまり現在の我々を規定する何かしらの根源が過去にある神話的時間として、アダムとともに存在しているという側面があります。この点に関して、私は非常に興味深いなと思ってきました。特にイスラーム神秘主義・スーフイズムの文脈では、彼らは修行を通して神との合一、具体的には神を目撃するということを、一アラビア語では「神をまなざす」とか「神を見る」とかそういう言い方をしますが、神との合一を目指すということを考えている、もしくは思考する側面があります。その時に、神と相まみえるということを考える彼らには、結局、アダムは神によって手ずから創られているので、神に最も近い存在であると理解される。それゆえ、彼らが神に近づいていくうえで、やはりこの存在というのが非常に重要な鍵になっていくこととなります。

それらの思想をさらに洗練・先鋭化させたイブン・アラビーの存在一性論＝ワフダト・ル＝ウジャードという思想があり、その中では、理想的な人間のあり方である「完全人間＝インサーン・カーミル」の最初の存在が、アダムであるとみなします。さらにこのアダムは、神の像・神の似姿として、もしくは神の名を通して創造された存在なので、最も完全性を帯びた存在として規定されます。だからこそスーフィーたちは、完全人間であるアダムを自分たちが目指すべき存在とし、そこにたどり着きたいと考えていきます。それとともに最後の預言者ムハンマドという存在も重要視しなければならないという事情もありますので、そこでどのような整合性をとるのかを考えるうえでも、アダムは非常に重要な役割を果たしています。

井筒俊彦 (1914～1993 年) というイスラーム思想研究の碩学が、イブン・アラビーの英知の台座の第

一章（アダム章と呼ばれている）の注釈の中で、「神の『ヒトミ』の役をするから人と呼ぶ」という語呂合わせに近いものですが、このことは非常に重要であると述べています。「インサーン」という言葉自体は「人間」という意味ですが、それとともに「瞳」という意味ももっているのだということです。この「瞳」を通して理念的に言われる神と人間の関係について、人間は神の瞳を通して何かを見ていると同時に、人間が見ているものは神も見ているということです。神に限りなく近づいた人間が見るものというのは、神が見ているものに近くなるのだ、という説明もしています。人間を考えるうえで、「瞳＝見る」ということが非常に重要であることが、この点からも言えるかと思えます。こちらの文章は、私の本文中には一言も出てきません。あくまで余談です。

本日、取り上げたいのは、「第8章：完全人間論の展開—アダムをめぐる神秘主義的人間学」というタイトルと、その後の私の研究成果です。先ほど申し上げました通り、スーフィー、イスラームの神秘主義者・神秘家たちが目指すものは神との合一です。彼らが目指す合一への手順としては、人間やその個人を取り巻く付属物を少しずつ消し去っていくことです。例えば、私・澤井真が、今天理大学に所属しているという社会的な立場や、講師という身分だとか、色んな要素や属性が重なる中に私がおりますが、それを一つずつ消し去ってゆくということです。そうした属性を消し去っていった結果、自己以外の何も残らないし、最終的には私という自己すらも消滅してしまう。それが結果的に真の自己に近づく、すなわち神と一体になることだと神秘家であるスーフィーたちは考えました。そうした過程の中で、名前や男や女という性別もまた、実は彼らにとっては消し去るべき対象です。

イスラームにおけるスーフィズム・神秘主義の役割として9世紀のアッバース朝期に民衆運動として始まったことが指摘されています。預言者ムハンマドの死後、イスラーム法学やイスラーム神学など知をめぐる状況から見れば、「イスラームの知」とでも呼ぶべきものが徐々に固定化され、みずみずしさを失いつつあった。男性中心主義的な部分は変わらないように思いますが、体制や知識人の側によって行われる法学や神学に対して、体験や感性・感情に基づいた思想、もしくは民衆を中心とした思想とする動きが登場してきた。ウラマー（知識人）に偏らずとも、イスラームの知を獲得できる、生き生きとした新たな仕方で神の知を獲得できるという、イスラーム神秘主義・スーフィズムが誕生しました。

今日、イスラーム内のジェンダー平等を目指す人々、すなわちイスラーム・フェミニストがスーフィズムを取り上げる時は二つの方向性があります。一つ目は、男性スーフィーに認められた女性を取り上げること、二つ目は、スーフィーによって論じられたジェンダー平等に関わるテキストを取り上げて、今日的なコンテキストから読み解いていくことです。一つ目は、例えば、「ラービー・アダウィーヤとか、アーイシャ、ファーティマ、ハディージャといった初期のイスラーム、もしくはイスラーム神秘主義を支えた人たちの中に女性がいた」と述べることで、イスラームにおける女性の地位を担保していくという側面があります。二つ目ですが、ジェンダー平等に関わりそうなテキストを取り上げることです。イブン・アラビーは、男性と女性という視点から人間論を論じた極めて稀有なスーフィーですが、彼の思想的影響力は今日でも絶大です。イブン・アラビーという思想家を取り上げていく中で、新しい人間論といえますか、今日的で現代に合ったイスラームの人間のあり方というものを論じていこうとするのが、イスラーム・フェミニストやイスラーム・ジェンダー言説だと私は考えています。

その中では、フェミニズム、イスラーム学、そしてジェンダー平等運動の共鳴ということも聞きます。先ほど申し上げたイブン・アラビーですが、イブン・アラビーが論じる男女の議論の根幹は、神に到る道程に一人立つ人間には、貴賤や男女の差などなく、全ての人間が霊的に平等であるということです。この点に関しては、イスラーム・ジェンダー言説やイスラーム・フェミニストにとっては、非常にあり

がたい議論になってきます。

それとともに、イブン・アラビーの思想の中で、存在顕現（タジャッリー）の議論があります。これは、神から人間に至るまで、「存在」というカテゴリーで考えると、色んな存在がある。絶対者（神）も人間も、ともに存在であるというものです。この存在という枠を通じて、すべての人間という存在が、絶対者という存在から流出論的に現れてくるというのが、存在一性論における存在顕現の考え方です。その中で男女の存在論的な差異として、アダム登場します。存在論的には、イヴからアダムは生じるのはあり得ないので、存在の流出の中ではアダムとイヴの順番が入れ替わることはない。それは秩序であり、入れ替わることはありません。ただし、人間を考えていくうえでは、男性・女性双方が存在して初めて人間であり、その男性と女性は霊的に平等です。それを解釈していく中で、例えばサアディーヤ・シャイフとかマリア・ダカケらイスラーム・フェミニストは、このアダムという存在が、非性別的であると主張し、「原初のアダム」を提示します。

イスラーム・フェミニストとイブンアラビー

男女の霊的等位と存在論的差異

- ・ 神に到る道程に一人立つ個人としての男女の霊的平等
- ・ 存在顕現論（タジャッリー 絶対者から人間に到るまで「存在」の流出という視点から論じる思想）における男女の存在論的差異（アダムからイヴが流出するという存在論的な上下は在る）。

サアディーヤ・シャイフ (SA'DIYYA SHAIKH) やマリア・ダカケ (MARIA M. DAKAKE)

- ・ 非性別的 (UNGENDERED) なアダムや「原初のアダム」 (PRIMORDIAL ADAM) という視点の導入。

「「インサーン・カーミル」すなわち完全人間という原型は、女性のイヴに対する男性のアダムではなく、男と女が創られた「ひとつの魂」、すなわち未だに分別されないアダムのことである。」 (MARIA M. DAKAKE, "WALKING UPON THE PATH OF GOD LIKE MEN?": WOMEN AND THE FEMININE IN THE ISLAMIC MYSTICAL TRADITION," JEAN-LOUIS MICHON AND ROGER GRAYSON (EDS.), *SUFISM: LOVE AND WISDOM*, INDIANA, 2006, P. 139.)

つまり、男としてのアダムと女としてのイヴに分化する以前、非性別的で原初のアダムが存在したことになります。このとき、アダムを男性と捉えるのではなく、アンジェンダーなものとして捉えるわけです。この議論は、必ずしもイブン・アラビー自身の思想に沿ったものではありません。とはいえ、ここでマリア・ダカケの文章を引くと、「インサーン・カーミル、すなわち完全人間という原型は、女性のイヴに対する男性のアダムではなく、男と女が作られた一つの魂、すなわちいまだに分別されないアダムのことである」。この「一つの魂」というのはクルアーン四章一節の中で見られる言葉です。神は一つの魂から人間（男と女）を創ったというのです。

以上がイスラームのアダムの地平から見えてくる現代イスラームにおけるジェンダー論で、イスラーム神秘主義思想の展開は、人間が理想的なあり方を模索しつつ神といかに向き合うか、という思想的営為の累積の結果であると結論付けることができると思います。スーフィーらの神秘主義思想は、クルアーンやハディースという思想的源泉を、アダムを通して解釈することで、神とのつながりを新たなかたちで模索しつつけています。さらに新しい人間論を構築するために、例えばジェンダー・スーフィズムや、ジェンダー・スーフィズム言説とでも呼べるものを過去の思想家から掘り起こしていきつつ、人間

の原初性に位置するアダムから考え直していくわけです。

アダムをめぐる神秘主義的人間論を現代的視点から考察すると、私たち人間がいかなる存在かという人間の根源性を、イスラーム・ジェンダー的な文脈での男女という視点を超えて、現代・現在を生きる私たちが再考・再構築すべき人間像のための手がかりを与えてくれているようにも思います。本日は、新しい人間像を再構築していこうというなかで、アダムが新しく解釈されて論じられていることの一部をお示ししました。これからも、アカデミズムにおける新しい動きも含めて、皆さんと議論していけたらと思っています。

木原：ありがとうございました。それでは、次に長沢先生よりコメントをいただきたいと思います。

\*\*\*\*\*

長沢：皆さんこんばんは。今回のタイトル「いま始まろうとしている人文学について—澤井さんの新著を読んで思ったこと」で用いた「いま始まろうとしている人文学」とは、エドワード・サイードの言葉です（『人文学と批評の使命』）。今日のコメントでは、最近読み直しているサイードの著作との関連で、澤井さんのご研究から何を学んだか、そのことがイスラーム・ジェンダー学にとってどのような意味を持つかについて、何かお話ししたいと思います。

とはいえ私はイスラームの専門でもジェンダー学の専門でもありません。澤井さんの本について誤読も多々あると思いますが、素人的な見方から、無手勝流にいくつかの話をさせていただきます。最初に、美、あるいは美的なるものとジェンダーとの関係について話をしたいと思います。皆さんの中にもご覧になった方がおられるかもしれませんが、3年ほど前、ユーミンと坂東玉三郎さんが「NHKのEテレSWITCHインタビュー達人達」に出演され、非常に興味深いことを話しておられました（2017年11月4日放映）。ユーミンが「舞台上立つってジェンダーレスじゃないでしょうか。女性でも男性でもない存在になる。仮に女性を演じていてもどちらでもない気がするんですね」と言うと、玉三郎さんもそれに次のように応えました。「女形っていうものって、やっぱり自分の持っている性（さが）が使えない、違うものになってゆく。それでお客様に失望させないようにしなくちゃいけないということの中で、役割からはみ出ないというか、その主我からでないというか…。」

それぞれに表現が面白いと思います。美の高みにおいては、男でも女性でもない存在になってゆく、ジェンダーの境界を越えるという話ではないでしょうか。このお話は、人間（ヒューマニティ）、および人文学（ヒューマニズム）において、ジェンダーや美がどのような位置を占めるかという問題につながるものです。こうした問題を手がかりにして、澤井さんが追究しているイスラーム神秘主義的人間学と、サイードが提起する新しい人文学との関係について、以下では考えたいと思っています。

ところでサイードは「音楽とフェミニズム」というエッセイも書いています。『サイード音楽評論Ⅰ』に収録されていますが、ここで西洋クラシック音楽がいかに男性優位であったかということ解説した後で、おそらくその例外としてベートーヴェン唯一のオペラ作品である『フィデリオ』を取り上げて、次のように述べています。「ベートーヴェンが、自分が人類を超えて永遠の高邁な王国に入ることができるかのように振舞っているところは、ある種の巨大なエゴイズムの現れだろう。だが彼のエゴイズムや、その注意深く構築された主観性や美的基準はことごとく、特定の個人であること、世俗の人間であること、政治的な人間であることを超えて上昇しようとする試みの一部である。その芸術が素晴らしい理由

は、あたかもそうであるかのように装っているとおり人間的だからではなく、まさに人間を脱し、政治を脱しようとするための意図のためなのである。」

『フィデリオ』は、レオノーレという女性が夫を救うためにフィデリオという男に扮して監獄に入る話です。サイードの言うように、人間を超えて、永遠の高邁な王国、天上の世界に行くところに美の極致がある。まさにそれが『フィデリオ』において感動的に表れているのが、クライマックスの男女の合唱の場面である。そこではジェンダーの境を越え、人間を脱した世界が描かれている、というのです。ここで澤井さんのイスラームの神秘主義的人間学とサイードの新しい人文学との関係についてお話しておきたいと思います。「序」のところで、澤井さんは次のようにおっしゃっています。「イスラームの神秘主義的人間学—タルク・アサドやサイードと同じく、アンソロポロジーを人類学ではなく人間学として使っていますが—そのようにして展開してきたスーフィーの思想を人間存在の根底から捉えなおし、新しく構築される人間をめぐる知を再考する試みである」と。先ほどご説明があった通り、これはイスラーム研究を通じた新しい人文学、ヒューマニズムの挑戦の一つとも考えられるのではないかと思います。

このイスラーム神秘主義的人間学の追究において、中心的な課題になるのはアダムをめぐる議論です。「序」では、宗教学の中心的な考え方を批判するとともに、果たして宗教学はイスラーム理解の役に立つのか、有効な手段になるだろうか、ということを論じています。そしてこの問いに対し、本質主義的な宗教学理解ではなくて、個人の信仰体験に注目した歴史的な宗教学理解を目指そうという方法論的な態度を提示されます。これを「体験主義」という言葉で、澤井さんは表現なさっている。この体験、経験を重視するという方法論的な態度は、サイードが提起する新しい人文学にも共通して見られると思います。サイードと言えば、『オリエンタリズム』が非常に有名です。この本でサイードは知と権力の間関係性を暴き、オリエンタリズムという学問を西洋人文学の一部として、このヨーロッパ中心の人文学全体を批判の射程に入れていました。こうした人文学（ヒューマニズム）に対する批判はイスラーム・ジェンダー学の中心的なテーマとなりうると考えています。しかし、たんなる人文学としてのオリエンタリズムの批判にとどまらず「新しい人文学とは何か」を示してゆくことが『文化と帝国主義』後のサイードの課題となりました。最後の著作となった『人文学と批評の使命』の中で次のように述べています。「今始まろうとしている人文学について、それは実際に使える人文学、自分が何をやっていて、学者として何に義務を負っているのか知りたいと願い、その原理を自分が市民として生きている世界につなげたいと思っている知識人や研究者にとっての人文学」である、と。イスラーム・ジェンダー学もこういう市民的实践としての新しい人文学の試みの一部でありたいと思っています。

サイードは、オリエンタリズムのような西洋中心の人文学ではない新しい人文学というオルタナティブについて、次のように言っています。「特に我々の人文学すなわち西洋人文学以外にも他の伝統があり、他の人文学もあるのだ。そういうことを考えないといけない。」ここで言う他の伝統・人文学には、澤井さんが議論しているイスラームの神秘主義的人間学も当然、入ってきます。

さらに、この新しい人文学は、様々な文化が混ざり合っている現在の状況に対応したものでなければならないということも言っています。本来、文化はハイブリッドなものでありますが、現在はさらに混ざり合って新しい連帯が生まれている、と。では、別の伝統を持つ他の人文学という他者の認識と交わり依存する関係、様々な伝統・人文学が相互作用するという地図を描いて、生産的な交流を行っていくということが、どのように可能なのか。そこで新しい人文学の方法論的な課題が出てきます。

そこで、先ほど述べた澤井さんが重視されている、「イスラーム神秘主義における人間探求と「体験主

義」という立場が重要な意味を持ちます。澤井さんは「序」で、スーフィズム研究において人間を探求する場合、個人の信仰体験を重視した解釈をすべきだと議論されています。この主張はサイードが言っているテクスチュアルな姿勢を批判する議論と非常によく似ています。観察可能な知、書かれたもの・表面的な知、あるいは外面知・内面知ではなく、神秘知・霊知、マアリファと言われるような不可視の知をスーフィーの神秘的な「体験」を通じて得られる、そのようにして神と人間との真の関係を模索することができるのだ、と。イブン・アラビーの言う「体験」が神と人間との存在論的な接続点となるという点が、方法論的な態度としてサイードの議論と比較できるのではないかと、ということになります。具体的には、アダム「神話」を追体験してゆくことで、人間の本質的特徴が明らかになっていく、アダムを理解することによって人間の本質を理解することができるのではないかと、という人間の体験を重視した議論です。このようにテクスチュアルな態度への批判という点でサイードの議論と共通した特徴があります。生きている現実をテキストの素材に変換してしまうオリエンタリズムに見られる態度に対し、サイードは『オリエンタリズム』の中で、「人間的なものと直接に遭遇して方向を見失うよりも、直訳すると見失うことを恐れてしまって、書物の図式的な権威に寄りかかってしまう」と批判しています。

ただし、人間の体験を重視するとはいっても、サイードの言っている歴史的・世俗的体験と、澤井さんの分析されている神秘主義的存在論的体験とを同じように扱っていいのか、ということが問題になります。「神話」としてのアダムの物語は、人間存在に先立つかたちで人間の本質を規定している、ということですが、この本質が存在を規定しているという関係における体験と、サイードの世俗的現実的体験というのは果たして同じように扱っていいのでしょうか。後者の個人の日常的な「生きられた体験 lived experience」に依拠する歴史主義と、前者の本質主義（本質が存在を発生させる）に由来する神秘主義的人間論は果たしてうまく相互作用ができるものなのでしょうか。

西洋人文学は、ルネサンス期にローマ時代のキケロの人文主義を発見することで生まれ、それが西方キリスト教カソリックで容認されて確立し、さらに世俗化の流れの中で 18 世紀以降、世俗的な人間学として近代西洋人文学として展開してきました。このように世俗的な経験として発展してきた歴史を持つ人文学と、イスラームの神秘主義的な人間主義はどのように接合することができるのかということですね。

ただ、ここで参考になるのは、スライドで「全体化理論の拒否と「民主的批評」(democratic criticism)」と書きました以下のサイードの文章です。「たとえ人間の経験には、何事にも還元できないような主観的な核のようなものがあるにしても、人間の経験は歴史性と世俗性を帯びているため、全体化する理論によって汲みつくせるものではない」。すなわち、この多様な他者＝人間による経験を互いに認め合うという、民主的理解として人文学あるいはヒューマニズムというのは存在している。それぞれが主体性という核を持った多様な存在があり、それを許容するものとして成立する。こうした議論を前提とすると、神との体験＝神を通じた経験さえも、新しい人文学の相互秩序の中に組み入れることができるのではないかと考えました。



# 新しい人文学と民主的批評



◎全体化理論の拒否と「民主的批評」「democratic criticism」

たとえ人間の経験には、なにごとにもたえがたい[→なにものにも還元できないような]主観的な核のようなものan irreducible subjective coreがあるにしても、人間の経験はまた歴史性と世俗性をおびているため、分析や解釈に供することができるが、かといって・全体化する理論によって汲みつくせるものではない(『文化と帝国主義』上79頁)

～多様な他者＝人間による「経験」を通じた(民主的)理解として人文学Humanismは成立する それぞれの主体性という核を持った多様な経験の存在を許容する それを前提にして、他の人文学との「相互地図」を描くことができる (神との体験・神を通じての経験さえも)

人文学の力と重要性は、民主的で世俗的な、開かれた性質からきている (『人文学と批評の使命』26頁)

私は人文学というのは、人間とか人間性とは何かと問うとともに、人間相互の関係・自己と他者との関係をいかにあるべきかを問う知的営為ではないかと思います。それに関して重要なテーマとなるのが、冒頭で述べたことに戻りますが、美、美諸学というものかもしれません。人間性を成り立たせるものとしての美です。そこにはジェンダーの境を越えた世界があるのではと思います。また、美を楽しむという体験、経験において、宗教的体験と歴史的世俗的体験の間にどのような歴史的接続があるのかが問われることとなります。

この点をめぐって澤井さんは次のように議論されています。存在的流出論によれば、神の自己顕現によって、人間の美しいものどもは彩られ、魅力を増す。醜くするものも神の意志によるものであるということです。美＝快樂という存在は自ら流れ出す絶対者によるものであって、これらの美しい宝石と神との媒介者こそが叡智の台座＝指輪の台座としての人間、アダムのなのである、という議論を展開されています。この叡智の台座とは、神が作り出した宝石のように輝かしい叡智を支えるもの、それが人間にとっての神の代理者性としてのアダムであろうと。ここで人間の定義としての「インサーン」という言葉が、アラビア語では視力を生じさせる瞳なのだとしているというのが非常に面白く感じました。人間は、神の作り出す美しい世界を、神の瞳として見る。まさにこの神の眼差し＝バシヤルという語が「人類」を示すという言葉となっているのだと。神が作った美しい世界を愉悦できるのが人間であり、神の代理として、瞳として文化を楽しむことができるということです。これは、まさにベートーヴェンをはじめとする芸術家が目指してきたものではないかと思ったわけです。

さて、澤井さんがお話になったように御本の第八章で、イスラーム神秘主義的フェミニズムの可能性について議論されています。人間という存在の顕現において、アダムがイヴを作りマリアがイエスを作ったように、男女いずれからも人間という存在は顕現する。ただ、存在顕現の順番において男が先行しているだけであり、男が女を凌駕するのは「使徒性と派遣性」のみであるというご説明だったように思います。ここで面白いと思ったのは、これは男性目線ですけれども、美の一つとしての女性ということです。澤井さんによると、イブン・アラビーは神を愛でさせる美しいものが三つあると述べたということです。一つが女性、二番目が薫香、三番目が神の喜びが礼拝の中でなされること。つまり、女性のう

ちに美を認めているということです。ここでちょっと私が分からなかった部分ですが、「女性の中に絶対者を見るが、それは受動的行為なのである」というところを説明してほしいと思いました。

それにしても、よくムスリムの方が良く素晴らしい光景を目にしたときに発する、感嘆の言葉、「スプハーナッラー」(神に栄えあれ!)、直訳すれば神を楽しませるもの、神の悦楽という表現を思い出します。男らしい美、あるいは女らしい美を超えるものが、信仰の高みにおいてある。これはイブン・アラビーが男なので女の中に美を見ているわけですが、逆の関係ももしかりではないか、つまり美は女性の中のみならず存在するものであり、むしろジェンダーの境を越えたところにあるのだろうということです。

結びにかえて、これまたNHKの番組ですが、今月初めに放映された、中国四川省にあるチベット仏教の少数派のチョナン派の僧院の話に触れたいと思います(BSプレミアム「中国秘境 謎の民 天空チベット タンカ絵師の郷」2021年3月6日放映)。この僧院には貧しい家庭出身の若者たちを絵師に育てる学校があります。その卒業作品であるタンカと呼ばれるチベット仏教の掛け軸の仏画に、最後に仏の瞳を僧院の長であるチャンポセ法主が書き入れるという場面があります。このとき法主は「智恵と慈悲が合わると、仏の瞳になる」と言われていました。さきほどのイスラーム神秘主義における神の瞳としての人間という話を思い出し、「仏の瞳」との関連が興味深く感じました。それとともに、たしかに仏画とか仏像はジェンダーレスだということも思うのです。この信仰の高み、美の極みにおいてジェンダーレスになってゆくという問題。サイドが言う、これから始まる人文学のジャンルとして、美とジェンダーをめぐる問題を取り上げて面白いと思っています。以上で終わります。

木原：長沢先生ありがとうございました。それでは澤井先生に、今の長沢先生からのご質問にお答えいただければと思います。

澤井：それでは端的に二つお答えいたします。まず一つ目の「行為としての目撃」についてです。目撃というのは、私たちは実は何かを見ている、対象を見ていると思うわけですが、神と人間の関係性、特に人間が神を見るというのは、人間が神を見ているのではなくて、神が人間に見させているという意味での受動性、つまり神についての経験は、私たちが能動的に主体的に行えるものではなく、常に受ける側で受動的な関係性だということです。だから見ると言っても、何となく私たちは何かを見ている・思考しているという印象を持ちがちですが、必ずしもそうではないということです。具体的に言うと、女性を見ている、女性の中に神の美を見出す、ということがありますが、そうではなくて、女性を見ているけれども、そこに神は女性を通して、神を見させているということです。イブン・アラビー的に解釈すると、見るのか見させられているのかということに関わってきます。以上がまずは簡潔にお答えさせていただきました。

私自身も先生のお話を聞いていて、「そういえばそうだな」と思ったのが、体験と美、芸術というところでした。私は体験主義と申しましたが、神秘主義というその概念自体が何を志向していたかといえば、人間性の本質が一体どういうところにあるのかということ、体験を通じて理解していこうということでした。先生がおっしゃった世俗的な経験と神秘的な経験というのは、何が違うのか。必ずしもそこに線引きすることはできないと思います。アラビア語で「体験」にあたる単語はなく、その時に、もし私たちが経験・体験という言葉を使うときに、世俗的な日常経験・体験は、私たちが何かしら日常生活を送っている中で、起こりうることですけれども、私たちがヴィヴィットに記憶しうることは、何らかの形で記憶され再構成される体験や経験になっていきます。私たちの生に意味を与えてゆくものが、ある

意味では、それが限りなく振り切れたものというのが神秘主義的な体験であると思います。世俗的な経験と体験と、神秘主義的な体験のそうした接合点というところ、おそらくスーフィーたち、神秘主義者たちは世俗的な体験の中にも、その中に神の現れ・神の接合点を見出していこうという形で、経験・体験を捉えなおしてゆく、そういう動きだろうと思います。その最も洗練されたものが神秘主義的な体験であり、先生がおっしゃるところの芸術・美・音楽、そういうものとして現れると、長沢先生の話聞いて思いました。人文学・人間学という部分でも、そうした芸術なり神秘主義的な体験なり、最もそういったものが洗練された状況の中に生まれてくるようなものとして捉えられるのではないかなと感じた次第です。以上です。

\*\*\*\*\*

木原：それではここから、質疑の時間に移ります。

質問者1：もう少し詳しくお伺いしたいなと思ったのが、イスラームのアダムから見えてくるものというスライドの最後のところについてです。ここに引用させていただいた、アダムのも神秘主義的人間論について考察することは、私たち人間はいかなる存在かという人間の根源性を男性と女性という視点から論じることであり、同時に現実を再考することでもあるということですのでけれども、もう少しかみ砕いて教えていただければと思いました。よろしくお願いします。

澤井：ありがとうございます。本日メインでお話させていただいたのは、サアディーヤ・シャイフとマリヤ・ダカケによるアダムの新解釈ですが、彼女たちが目指したのは、結局のところ、アダムという存在を非ジェンダー化することでした。彼女たちの議論は、イブン・アラビーの思想なりスーフィーの思想を用いて、人間をめぐる新しい知、とりわけイスラームの人間の知を作り出していこうという動きと関わっています。彼女たちがやっていることは、実はアカデミズムの領域に立ちながらも、研究活動とは違うレベルでジェンダー平等を含めた新しい知を積極的に生み出して、イスラーム社会を変えていこうという動きでもあります。その点で言うと、アカデミズムとイスラーム・ジェンダーの協働というか共犯というか、明らかに彼女たちはテキストを創造的に誤読することで、イスラームの新しい人間像を探し出していく。そこに、男性中心的なイスラーム共同体を変えていこうという動きが見いだせるのかな、と私は理解しています。このとき、アダムという存在は、人間の根源性に立ち還って人間というものを再認識させるツールという側面がある、というようなことを書かせていただきました。つまり人間像を再考するものであり、人間像を再構築してゆく側面があるのだろうと、そう理解しています。

質問者1：ありがとうございました。先ほどの完全人間というところの話ではなくて、そのあとに男女に分かれるということも含めて再考するということになるんですかね。

澤井：そうですね。完全人間（＝「インサーン・カーミル」）という言葉は、男性形でもあり女性形でもあるため、確かに、そこにはジェンダーはありません。「ラジュル」であればアラビア語で「男性」であり男性形であると言えますが—イブン・アラビーは意図的に「インサーン」を使ったと思いますが——究極的には、男性も女性もなくなるようなところを志向したのかなと考えたりします。

質問者2：以前15世紀か16世紀ぐらいの発掘物の中に、目を楽しませるものという表現・詩が含まれていたというのを読んだことがあって、長沢先生も注目されていた、この「目を楽しませるもの」という表現は、イスラーム世界に広く知られているものなのかをお伺いできればと思います。

澤井：そうですね、お答えになっているかわかりませんが、例えば目という言葉の意味は複数ありまして、アラビア語で「アイン」という言葉は、「目」という意味もありながら、「源」、「己自身」、「本質」などの意味を込めて使います。例えば本当かどうかは別にして、井筒俊彦はイスラーム文化というのは目の文化、鋭い目をした砂漠の民の文化というような話をします。目を意味する「アイン」の語にそれだけの意味が加えられているのは、やはり視覚を中心に組み立てられた文化かなと思ったりします。

質問者3：澤井さんのご説明の途中でスーフイズムの、イブン・アラビーよりももっと前の初期の9世紀以降というようなところで、イスラームの知を揺り動かす女性も参入可能な学問的な知という話がありましたが、これは、9世紀10世紀当時、女性も参入可能な知という認識があったわけでしょうか。

澤井：例えば法学を勉強しようとした女性研究者として、卑近な例ですが、村田幸子先生がいらっしやいます。イランで勉強していた時に、先生が法学を勉強しようとしたらダメだと言われたという話があるように、女性が法学を勉強するということが自体が難しかった。「タクリード」（追従）ではないですが、女性はウラマー（知識人）ら法学者の言うことを聞いて、追従するしかないということになりうるかなとは思っています。

それに対して、民衆やいわゆる学問的な素養のない人であっても、神についての知識、ウラマーに学ぶとかウラマーの言うことを聞くのではなくて、自ら獲得していけるような知識として、タサウウフ、（イスラームの神秘主義）があったのだと論じられています。かなり図式的な説明かもしれませんが、12世紀ぐらいになるとスーフイーの集団化（タリーカ）を考えゆくと、かなりの程度、時の政権と結びつきながらも、民衆が作り出した知の側面も大きかったのでは、と考えます。女性は記録として残りにくかったというのがありますが、少なからず女性について、女性スーフイーの記述も人名辞典にも見出すことでもできるので、イスラーム神学とは一線を画するような学問体系・学問知だったのかなと理解しています。

質問者3：ありがとうございます。女性のウラマーがいなかった、女性の法学者、学問としてやる人がいなかったわけではないと思いますが、確かに女性のウラマーが書いたものというのは残っていないですね。でもそういう意味では、スーフイズムも同じなのではないかなという感じがして。もちろん別格な例外として、ラービア・アダウィーヤがいますけれども、それが9世紀以降に女性が参入可能だったと言えるのかについてはまだモヤっとしています。もちろん法学・神学に対峙するような民衆的な知というのはそうかもしれませんが、女性に限定した時に、もうちょっと具体的な例があればわかりやすいかなと思いました。

澤井：ありがとうございます。たしかに女性のスーフイーが書いたものも、近年英訳されて登場していますが、それでも数えるくらいしかない。スラーミー（412/1021年没）が描いた女性スーフイーにつ

いて出ているのですが、書かれたものはあまりありません。実はそう言いながらも、男性のスーフィーでも著作が残されていない、あるいは伝承しか残っていないスーフィーたちもかなりいます。つまり、男性だからといって著作がたくさん残っているとは言い切れないと思います。イブン・アラビーは、かなりの程度女性のスーフィーの記録も残っていて、影響を受けたということも自ら述懐しています。その点でいえば、女性スーフィーの存在がなかったわけではなかった。彼はアンダルス地方出身ですが、当地にも女性スーフィーたちが確かにいたことの片鱗が見いだせるかなと思います。

木原：ありがとうございました。そろそろお時間になりますので、最後にご登壇の先生方より一言コメントをいただきたいと思います。

澤井：ジェンダー研究というかイスラーム・ジェンダー科研だからこそ、このテーマでお話しできたと思います。その意味では、アカデミズムとジェンダー・スーフィズム言説の重なりというのは、実は私たち人文学系の研究者にとっては非常に重要な点だと思っています。アカデミズムというと客観性を重視し、主観性を限りなく排除しながら知識を獲得していくことのように見えますが、研究によってはそうとも言い切れないし、必ずしもそうである必要がないときもあると思います。なぜかと言えば、人間に関する知は、ジェンダーという問題を通して新しく生み出されているからこそだろうと。だからこそ、イスラーム神秘主義と人間というテーマで、ジェンダーを絡めて論じていくことには様々な意義があると考えています。本日はありがとうございました。

長沢：美において、美的なものはジェンダーレスですけれども、知識・学問もジェンダーレスなんですよ。そういう意味で知と権力の問題ということですね。あたかも女性を抑圧しているなんてことは少しも感じさせないオーソドックスな学問というのが洋の東西を問わず存在してきたということではないでしょうか。エドワード・サイードの批判しているオリエンタリズムの一環としてジェンダーの問題が出てくるわけで、知と権力における関係性の問題ですよ。その社会の抑圧状況、抑圧を前提にしていながら、毛ほども感じない形で高尚な学問的な議論をしていた、と。そこには当然イスラームの知については男が議論をするのが当たり前だという観念がずっと通用してきたわけです。それが様々な形で——他の分野でもそうですけれども——問われているのではと思います。澤井さんの議論をはじめとして、イスラームにおける知と権力の問題というのがますます議論されてゆくのではないかなと思っています。どうもありがとうございました。

木原：ありがとうございました。それではそろそろお時間になりましたので、本日はこのあたりで終了とさせていただきます。本日はお忙しい中、今年度最後の巣ごもり読書会にご参加いただきどうもありがとうございました。